

与謝野晶子の未紹介震災歌

関東大震災からちょうど二か月後、大正十二年十月一日に大日本雄弁会講談社から「〔大正〕大震災大火災」(一)内は角書」という本が出版された。A5判三百ページの堂々たるもので、震災の写真・記録、その他震災にまつわるエピソードが多数掲げられている。その二六九ページに、「天変動く」と題する与謝野晶子の短歌十首が掲載されている。このうち、四首については講談社版「定本与謝野晶子全集」にも見当たらず、学会未紹介と思われるので、ここに披露する。

まず、全十首を紹介する。

もろもろのもの心より掻き消さる天変うごくこの時に遭ひ
 天地崩ゆ生命を惜む心だに今しばしにて忘れはつべき

菊池真一

生命をばまたなく惜しと押しつけにわれも思へと地の揺らく時。
 大正の十二年秋、一瞬に滅ぶる街を眼のあたり見る
 休みなく地震して秋の月明にあはれ燃ゆるか東京の街
 燃え立ちし三方の火と心なるわがもの恐れ渦巻くと知る
 頼みなくよりどころなく人の身をわが思ふこと極りにけり
 都焼く火事をふちどるけうとかるしろがね色の雲におびゆる
 人は皆亥の子の如くうつけはて火事と対する外濠の土堤
 なほも地震揺ればちまたを走る人生き遂げぬなど思へるもなし

このうち、次の四首が全集に見られないものである。

生命をばまたなく惜しと押しつけにわれも思へと地の揺ら

ぐ時

大正の十二年秋一瞬に滅ぶる街を眼のあたり見る

燃え立ちし三方の火と心なるわがもの恐れ渦巻くと知る

人は皆亥の子の如くうつけはて火事と対する外濠の土堤

これら以外の六首は歌集『瑠璃光』にも収められている。「大正の十二年秋」で始まる歌は『瑠璃光』にもあるが、「大正の十二年秋帝王のみやことともにわれはほろびゆく」というもので、「〔大正〕大震災大火災』のものとは別の歌というべきである。